

vel fuscis, pallidioribus in juvenilibus, ovatis lanceolatis crispato-linearibusque dense vestitis et rachidibus paleis pallide brunneis crispato-linearibus subdense praeditis, dorso dein glabrescentibus.

Nom. Jap. Kiyozumi-meshida nom. nov.

Hab. Prov. Kazusa: Mt. Kiyozumi (T. Namegata, May 1951); ibidem (T. Namegata, July 1951 - type in Herb. Fac. Agric. Tokyo Univ.).

This variety is so similar to the typical form that we cannot distinguish them by the characters of their rhizomes, pinnae and pinnules. But the stipe of *Dryoathyrium coreanum* var. *coreanum* is (20-) 30-50 cm. long, and except the base, almost naked as well as the rachis.

**○*Premna staminea* Maxim. とは何か** (大井次三郎) Jisaburo OHWI: What is *Premna staminea* Maxim. ?

ハマクサギ属は世界に約 40 餘種知られ、主として熱帯に分布して居る。日本の暖地から臺灣にかけてはハマクサギとタイワンウラクサギの 2 種があるのはつきりして居るが、Maximowicz は 1887 年に屋久島及び奄美大島から *P. glabra* を、臺灣から *P. formosana* を、又琉球から *P. staminea* を記載して居る。

この *P. staminea* Maxim. は雄蕊が長く花外に抽出し、葯の長橢圓形なのが著しいと云ふ。記載によると幼時星毛を生じ、葉は長橢圓形又は稍橢圓形で上縁に鋭鋭齒があり、花部は平坦、小梗は萼より長く、花冠の裂片は他のものに比して不同著しからず、雄蕊は同形で長く抽出し、葯は大きく、黄色の腺點があると云ふ。此の植物は植物名鑑にも引用されず、正體は全く不明であつたが最近博物館で當時に Maximowicz に送つた副標本が整理されたのであるがその中に No. 1669. *Premna* n. sp. ? *P. staminea* Maxim. n. sp. Maximowicz 氏検定) と云ふ手記のある琉球産の採集者のない一枚があり、原記載とよく一致するし、*Liukiu* (Tanaka flor.) とある副標本の産地とも略一致するので、その Isotype に相當すると思はれる。此の標本は *Premna* でなくて、*Calli-carpa* であり、琉球列島に普通な葉の稍厚くて長橢圓形のオホムラサキシキブの一型に過ぎない。正確無比と云はれたマ氏にして、しかもその前の頁にムラサキシキブを取扱っているのであるから、何かほんの一すしたことにこだはつて感違ひをしたのであらう。

**○ギンリョウソウの和名** (原 寛) Hiroshi HARA: Japanese names of *Monotropa* and *Monotropastrum*.

なかい間ギンリョウソウと呼ばれてきた植物が、*Monotropa* と *Monotropastrum* という 2 属のものの混りである事を初めて紹介したのは本誌 14 卷 810 頁 (1938) であつた。その時和名については深く考證もしないで、日本では *Monotropastrum* の方が *Monotro-*

pa より普通であるから、その方にギンリョウソウの名を残した方が混亂を起さないだろうと簡単に考え、*Monotropia* の方へはユウレイタケモドキの新名をあたえた。ところが今からみるとこれが反つて混亂の基になつた感があるのは申譯なく思つている。

ギンリョウソウはあの雪白人特異な形が人目をひくので古くから知られていた様であるが、初はキノコ的一种と考えられていて、最古の確實な記録は、松岡玄達著「怡顔齋菌品」(寶曆11年刻1761)と思われる。その上巻15丁に「幽靈草」として簡単な圖があり、下巻17丁には「ツユザヘモン」として「ナンバンギセル」と共に見出しに併記され、「梅雨左衛門又幽靈草ト云藝園家=銀竜草ト呼色甚白シテ鱗甲アリ」と説明があつて次にナンバンギセルの記事がのり、終に「トモニ菌ノ類也」と結んである。

山本亡羊著「百品考三編」(嘉永6年刻1853)上巻14丁には「水晶蘭 和名イウレイタケ、ヤマツクヅクシ阿州」とし、「物理小識、高山生、水晶蘭、獨枝白螢、乃白芝也。文道七條氏考ルトコロナリ山中樹下ノ極陰地ニ生ス莖高四五寸箸ノ巨サナリ潔白ニシテ透徹スルガ如シ本ヨリ梢ニ至マデ鱗甲ノ如キモノアリ莖ヲツ、ム梢ニ一花アリ白色蘭花ノ如ク瓣短シ後小莢ヲ生ス亦蘭等ニ同ジ日ニ當レバ乍チ枯萎ス手ニ觸レバソノ處淡黑色ニ變ズ蓋シ列當(ハマウツボ)ノ類ナリ」と述べてある。

松浦武二郎著「石府日誌」(萬延元年刻1860)にも「ベニバナイチャクサウ」と共に圖がでていて、「竹馬草またナンバンギセルといへる類にして少し異れり上川イチナケに多し」とある。本文によれば安政4年(1857)4月28日にイチナゲ(上川盆地)に着いて居り、發生の時期からも *Monotropastrum* である。

又伊藤圭介著「日本産物志」武蔵下(1873)7丁に圖を伴つて解説されている「ギンリヤウサウ、ユウレイサウ、ユウレイタケ」は、その雌蕊の圖によつて眞正の *Monotropia* であることが分る。

牧野先生は日本植物圖鑑の訂正(1948)で、私とは逆に、*Monotropia* に對しギンリョウソウモドキを除き舊來の稱呼ギンリョウソウ一名ユウレイタケ一名ツユザエモンとすると述べられ、一方 *Monotropastrum* にはマルミノギンリョウソウの新名をつけられた。

しかし上述の古い文献を見ても、近年まで専門家も氣付かなかつた兩植物が區別されて取扱われていたとは考えられず、ギンリョウソウ又はユウレイタケの稱呼はこの兩者を混合した總稱とみるのが妥當である。若しツユザエモンの名が梅雨の候に出る事から名付けられたとすれば、反つてその季節に見られる *Monotropastrum* の方と考えられる。

何れにしても現在ではギンリョウソウといつたのではどちらを指すのか分らなくなつてしまつたので、この兩植物にはつきりした別々の和名を用いるのが今後の混亂を避ける最良の方法である。

そこで *Monotropastrum* の方へは、その圓い平滑な果實を表わして牧野先生がつけられたマルミノギンリョウソウを採用することとし、*Monotropia* の方はその發生の時期が前者よりおそく殊に晩秋になつてその裂開した果實を採集する機会が多いのでアキノギンリョウソウの名で呼びたい。

終に色々文献について教えて下さつた久内清孝氏に深謝する。(東大 理學部)